

観光を再定義する温泉施設  
—「観光空間と地元空間」、「自然と人工」の弱いつながり—

21419021 下田 彩加  
指導教員 宮 晶子 准教授

箱根湯本 観光客と地元住民 自然と人工性  
温泉施設 空間充填三角錐 誤配達

研究の背景

現在の日本には観光客なしには住民の経済が成立しない地域が存在し、「あらゆる場所が、観光客の視線をあらかじめ内面化し、町並みやコミュニティをつくるように、テーマパーク化している」と批評家の東浩紀氏は述べている<sup>1)</sup>。古くから温泉地、観光地として発達し、私の父の実家が日帰り温泉施設を営んでいる箱根湯本もその例外ではない。

平成 22 年の国勢調査によると、箱根湯本は総人口 13,853 人に対し、地元住民の従業者数が 8,463 人と半数以上の人がそこに住み働いている。そこでは少し窮屈な地域コミュニティから解放されたいなどの思いも生まれているのではないだろうか。

観光地のコミュニケーションについて観光客と地元住民の両面から考えてみる。「人間にはいくつもの顔がある。」「相手次第で、自然と様々な自分になる。」<sup>2)</sup>、と小説家の平野啓一郎氏は述べているが、相手だけでなく、居場所や状況次第で様々な自分になると考えられる。観光地での他者との関わりは基本的にはその場限りの期間限定のものという考えが無意識に存在しており、観光客であるときの人間は普段より少し社交的な顔になるのではないか。

自分自身の可能性を広げ人生を充実させるには、自分と深い関わりのある人だけでなく、自分のことをあまり知らない人とのつながりも必要である<sup>3)</sup>と東浩紀氏は言う。観光地での地元住民と観光客の関係は、双方にとって人生における「弱いつながり<sup>3)</sup>」になり得るが、現在はそれが活かされているとは言えない。

研究の目的

箱根湯本の観光地ゆえの観光客の非日常的空間と、地元住民や従業員の日常的空間が存在するという性質を活かすことで、双方にとってその期間だけの限定的な関わりだからこそ生まれるコミュニケーションのあり方や、それによる地域社会の活力の上昇が期待できると考える。

そこで本研究では、父の実家である日帰り温泉施設の建て替え案を提案する。一般的な観光施設に見られる店舗の裏側や従業員の住まいを「地元空間」と呼ぶことと

する。それを隠すのではなく、「観光空間」と「地元空間」がそれぞれ動線や外部空間を通して見え隠れし、それにより予期していなかった観光施設の裏側がみえるような空間を構成する、新たな観光施設の形態の提案を行う。

敷地

神奈川県足柄下郡箱根町湯本 657

敷地は箱根湯本駅から徒歩 7 分、駅前商店街が建ち並ぶ国道 1 号線沿いを北西に進んだ先に位置する。敷地の東側と南側には旅館や駐車場が存在し、北側には国道、早川を挟んで塔ノ峰がある。西側は湯坂山に面し、山の麓部分は岸壁が剥き出しになっている。

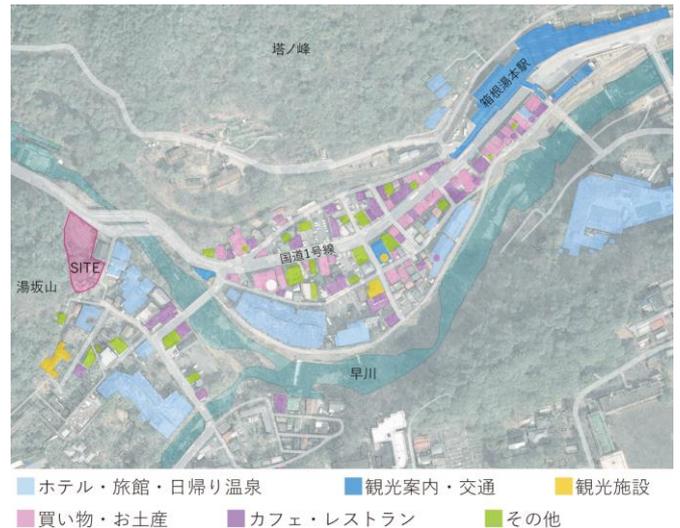


図 1 箱根湯本駅一敷地周辺地図



図 2 敷地周辺航空写真

設計提案

・プログラム

既存の温泉施設の建て替えを提案する。内部空間は「観光空間」と「地元空間」を動線や外部空間をとおして人々の動きや視線が交錯するように構成する。この構成により、観光客に向けた商品としてのテーマパーク化された観光施設ではなく、予期しないコミュニケーション(=誤配達<sup>1)</sup>)の可能性が潜む空間が生まれることを目指す。

・コンセプト

①「観光空間」と「地元空間」が混在し見え隠れする空間をつくる。



図3 混在する2種類の空間

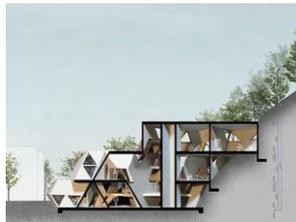


図4 断面イメージ

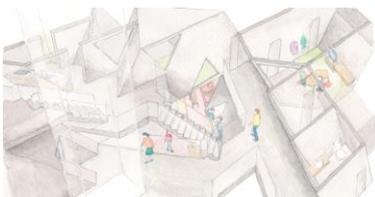


図5 客室と住人の居室への動線が交差する2階吹き抜け部分

②自然と街(人工性)をつなげ、その両者に溶け込む建築を目指す。

一敷地は西側に自然(湯坂山)、南北側に人工性(旅館、駐車場)が存在する。そこで、ゆるやかなコンターを引き、山を延長させ、かつ街並みと連続するように建物をつくる。

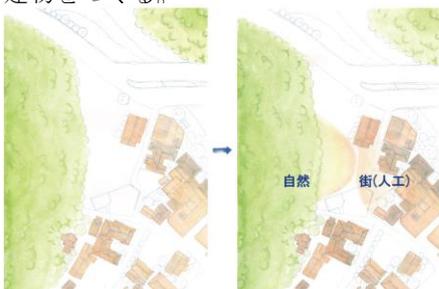


図6 コンセプト②ダイアグラム

・手法

建物の形態として岩肌のごつごつとした表面や木々の樹冠から幾何学体を選択した。辺の長さの比が  $2:\sqrt{3}:\sqrt{3}$  の三角形からなる四面体をユニットとして用いて設計し、敷地にある横穴式源泉跡の洞窟のような空間が拡張した

ような空間をつくる。これは単独空間充填三角錐であり、その2面角は60度と90度となる。

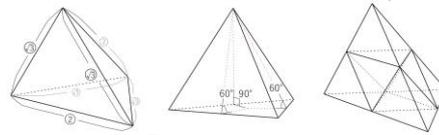


図7  $<2:\sqrt{3}:\sqrt{3}>$ 四面体の特徴

敷地東側の路地の向かいに建っている旅館の壁と、ユニットの90°の面が向かいあうようにユニットを配置する。残りの60°に傾いている面は、山の傾斜と馴染む。

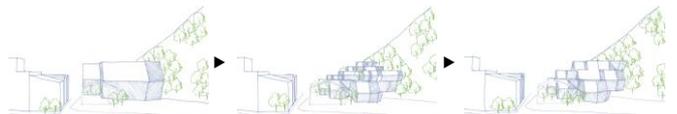


図8 ダイアグラム

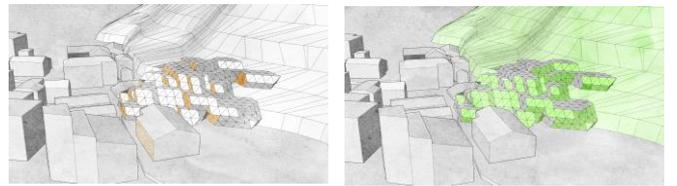


図9 敷地東側の道路沿いの様子 図10 60°に傾いた壁と山の様子

三角形の長辺が2700mmの四面体を1つのユニットとし、鉄骨造で組み立てられる。表面のマテリアルは、開口部(ガラス)の他に、板張りとしシン吹付と天然スレートとする。これは、周囲の旅館の板張りの外壁や、山の土や岩肌との調和を狙って採用した。山側から街側に進むにつれ板張りの壁が増え、ユニットのかたまりの大きさとしても、マテリアルとしてもゆるやかに山(自然)に近い表情のものから、街につながっていくように考えた。

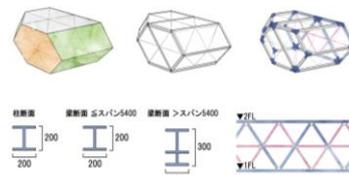


図11 構造(ある1部屋の例)



図12 模型写真と外壁



図13 1階ロビーの様子



図14 [1階浴室の様子

主要参考文献

- 『ゲンロン0 観光学の哲学』  
著者：東浩紀 発行所：株式会社ゲンロン 2017年発行
- 『私とは何か「個人」から「分人」へ』  
著者：平野啓一郎 発行所：株式会社講談社 2012年発行
- 『弱いつながら 検索ワードを探す旅』  
著者：東浩紀 発行所：株式会社幻冬舎 2014年刊行